受けた好意 懸け橋に

城西大生 韓国で企業視察

坂戸市の城西大経済学部の学生らが韓国で実施したビジネス研修から帰国し、同大で研修を振り返る事後学習を行った。日韓関係が不安定化する中での訪韓だったが、学生からは「好意的に迎えてくれた。今回の経験を両国の懸け橋にしたい」などの声が聞かれた。（関根慶治）

韓国研修を振り返る学生ら＝城西大坂戸キャンパス

研修は経済学部長の李熙錫（イ・ヒソク）教授が引率し、応募した1～3年生17人が参加した。8月26日～9月2日にソウル市や大田市、釜山市を訪問した。仁川国際空港や釜山港新港などの物流拠点をはじめ、サムスン電子、ロッテホテルなど韓国を代表する企業などを視察した。韓国の伝統的な結婚式やビビンバ料理作りといった生活文化にも触れた。

2年生の中山瑛介さん（19）は「ホテル業界に興味があり、普段は見られないところまで見学できて勉強になった。世界を舞台に仕事をするのもいいと感じた」。2年生の柳沼香実さん（20）は「韓国語の授業を取っていたが、韓国語で会話ができなかった。ちゃんと語学は身につけないといけない」と実感したという。

海外姉妹校の建陽大や東西大の学生とも現地で交流した。2年生の中込夕ビデさん（20）は「韓国の学生は僕らが不快な思いをしないよう考えてくれた。今度は自分が日本を訪れた韓国の方に同じように接したい」。1年生の紺野瑞月さん（18）は、金海国際空港（釜山）に携帯電話を忘れ帰国。韓国の航空会社が親身に対応してくれて、携帯電話が手元に戻ってきたエピソードを紹介した。

李教授は「学生が自分の目で見て学ぶことの意味を知る上でも良い研修だった。今後の人生につながる経験ができた」と話していた。